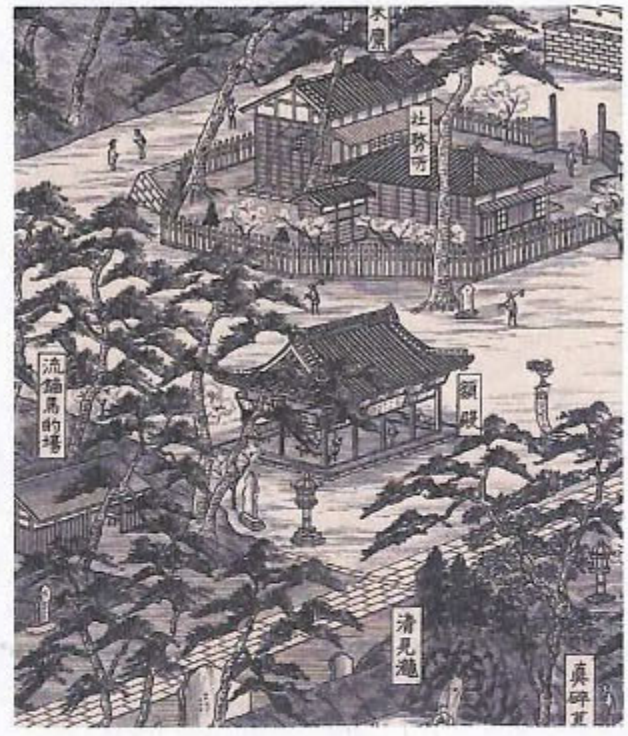


絵馬に関する覚え書き

飯香岡八幡宮には享和二（一八〇二）年の堤等舟の朝比奈三郎義秀・曾我五郎草摺曳図をはじめ堤秋泉・堤等国・堤等園等、江戸堤派の絵師の絵筆による絵馬が多く伝来している。浮世絵師系の絵師たちが描いたこれらの絵馬は、素人風の絵馬が多くある中でひとときわ光彩を放つ存在であり、飯香岡八幡宮のように地方の中心的神社に参詣する折に、社頭に掲げられた立派な大絵馬を見ることは近隣の人々の身近な楽しみであり、隣村に先駆けてそれらを奉納する事は村人の誇りであった。

平成元年九月、土蔵の改築のために中を整理していた際に、土蔵内より筵にくるまれた状態の二十面の絵馬が発見された。原色を留めた完全なものも含まれていた。飯香岡八幡宮には明治二十一年の『日本博覧図』に所収の絵図などによると額殿が建てられていたことを窺い知ることが出来るが、早い時期に額殿は失われている。軒下に掲げられた時期が短く、すぐに土蔵に収納した最適な湿度・温度のまま保存され、状態良く伝来したと考えられる。



明治二十七年二月に印刷された「千葉県上総国市原郡八幡町神社飯香岡八幡宮」に描かれている額殿。現在の手水舎から神楽殿の辺りにあったと考えられる。

一、八幡御大力船揃い図



筆者 初代昇亭北寿  
奉納 寛政六（一七九四）年三月十五日  
奉納者 上総国八幡村五大力船問屋角屋十兵衛冬木源左衛門

飯香岡八幡宮の春秋の例祭の折に、八幡裏に五大力船が連なって奉祝したという。

昇亭北寿は、葛飾北斎の門人。姓不詳、名は一政。昇亭と号す。両国薬研堀に住んでいた。北斎の洋風版画を引継ぎ個性的な作品を描いた。遠近法、陰影法など、かなり表現派的な作風であった。空を大きく取った低い地平線や水平線、動いている様な入道雲あるいは霞状の独特な雲の表現、銅版画の様な乾いた墨線、三角形の明暗表現で山や土手の立体感を表すなど、二十世紀初頭のピカソたちキュビズム（立体派）の先駆をなす作品が、江戸で既に北寿によって試みられている。作画の大半は風景画であったが、風俗画や狂歌本の挿絵も残している。『武江年表』の享和年間の記事に「北寿浮絵上手」と記されていることから、当時相当評価され人気を得ていたとわかる。

平伏さ〜



二、朝比奈三郎義秀草摺曳図



筆者 堤等舟

奉納 享和二(一八〇二)年十一月

奉納者 江戸新着場 寺本茂五郎 伊藤藤兵衛

所領争いのごとで、工藤祐経は叔父伊東祐親に恨みを抱いていた。祐経は郎党に狩に出た祐親を待ち伏せさせ、放った矢で祐親の嫡男祐泰に当たり祐泰は死ぬ。

祐泰の妻の満江御前とその子・一萬丸と箱王丸(管王丸)が残された。満江御前は曾我祐信と再婚。一萬丸と箱王丸は曾我の里で成長した。祐親の孫である曾我兄弟は厳しい生活のなかで成長し、兄の一萬丸は、元服して曾我の家督を継ぎ、曾我十郎祐成と名乗った。弟の箱王丸は、縁者にあたる北条時政を頼り、烏帽子親となってもらって元服し、曾我五郎時致となった。苦難の中で、曾我兄弟は父の仇討ちを決して忘れなかった。

十郎が工藤祐経と対面し身の危険にさらされているのを知り、曾我五郎は、工藤祐経の館に駆け込もうと意気込む。しかし、朝比奈義秀は冷静さを失っている五郎を止めようとして、五郎の草摺を引くが五郎は動かない。

三、牛若丸と弁慶



筆者 秋月門人堤秋泉

奉納 文化元(一八〇四)年七月

奉納者 観音町(治郎吉 卯之介 石松 七太郎 辰五郎 吉治郎 松治郎 弥惣治 半蔵 徳治郎

久次郎 巳之蔵 蔵治郎 安治郎 金五郎 勝

三郎 □蔵 辰之介 辰五郎 □平)

怪力の僧、武蔵坊弁慶は未だ生涯を捧げる主人に巡り会わないままに、太刀千本を奪い取ろうと夜ごとに街を駆けめぐり九九九本の太刀を手に入れた

最後の一本を奪い取るために五条の大橋で待ちかまえていた。そこへ、黄金作りの太刀をはいた稚児。弁慶は奪い取ろうと襲いかかるが、軽やかに身をかわされてしまう。弁慶は、欄干を次々に飛び渡り身のこなしが軽い稚児に翻弄され、太刀も奪えず負けてしまう。

翌日、弁慶は清水寺に参拝し、そこで再び稚児を待ち伏せして、清水の舞台において再び勝負するがまたしても負けてしまい、その稚児に仕える誓いをした。その稚児は源為朝の九男・牛若丸、後の源義経である。



四、三国志図か？



筆者 不詳

奉納 文化二（一八〇五）年

奉納者 濱本町

伴蔵 □治郎 勘之助 □太郎 留五郎

仲町

栄太郎 栄蔵 勘五郎

片町

寅松 初五郎 重治郎

場面不詳

五、為朝図（場面不詳）



筆者 三代目堤等淋

奉納 文化四（一八〇七）年三月

奉納者 鈴木太右衛門

雪舟十三世の孫を称した。通称は吟二。字は雪館。江戸の人。初め秋月、後に雪山、深川斎と号した。寛政頃、主に狂歌本の挿絵、文化期には滑稽本の挿絵を手がけている。さらに天保頃には、絵馬や幟絵、提灯絵などを描いた。また町絵師としては珍しく法橋の位に就いている。絵馬や屏風などといった肉筆画を最も得意としていた。三代目等琳を継いだ時に浅草寺に寄贈したといわれる「韓信股ぐり図」の他、雪山等琳の名を有する絵馬は東京近郊や上総安房方面の寺社にて多々見かけることがある。浮世絵師とは異なる町絵師という立場故か、狂歌絵本や摺物類以外の木版作品（錦絵）は殆ど残っていない。

門人として月岡栄山、堤等栄、堤秋月、月岡幡羽、堤秋琳、堤等明らがあり、栄山、等栄、秋月には絵馬の作品が見られる。また、「五百羅漢図」で知られる狩野一信も、一時等琳に弟子入りしたという。





筆者 不詳  
奉納 文化十一(一八一四)年

富士の巻狩の目的としては、征夷大將軍たる權威を誇示するためや軍事演習などの目的があったとされる。巻狩りの行動範囲は、富士の裾野の東方(現在の静岡県御殿場市や裾野市)に始まり、より西側の朝霧高原(現在の静岡県富士宮市)まで及んだ。『吾妻鏡』には「射手たる輩の群参、あげて計ふべからずと云々」とあり、数えきれない程大勢の御家人が参加したという。

頼朝の嫡男頼家が初めて鹿を射止めた。この後狩りは中止され、晩になって山神・矢口の祭りが執り行われた。頼家が鹿を射たとき、近くに控えていた然るべき射手の中から工藤景光・愛甲季隆・曾我祐信が召しだされ、矢口餅を賜った。頼朝は喜んで政子に報告の使いを送ったが、政子は武將の嫡子なら当たり前の事であると使者を追い返した。これについては、頼家の鹿狩りは神によって彼が頼朝の後継者とみなされた事を人々に認めさせる効果を持ったが、政子には理解できなかったとする解釈がなされている



筆者 堤等川(二代目堤等淋の弟子)  
奉納 文政十三(一八三〇)年八月一五日  
奉納者 南町

- 岩松 石太郎 幸次郎 佐吉 助次郎 伊勢
- 松 次郎吉 磯五郎
- 新田町
- 八十八 桑次郎 長次郎
- 片町 松次郎

お蔭参りは、江戸時代に起こった伊勢神宮への集団参詣。お伊勢参りまたは抜け参りともいう。お蔭参りの最大の特徴として、奉公人などが主人に無断で、または子供が親に無断で参詣したことにある。これがお蔭参りが抜け参りとも呼ばれるゆえんである。大金を持たなくても信心の旅ということで沿道の施しをうけることができた時期もあった。

文政十三年は、全国的に広まった数百万人規模の参詣のあった六十年周期の「おかげ年」で、八幡から伊勢へ参宮した人が記念に奉納した物である。この参宮絵馬は県内に現存する中で最古の伊勢参宮絵馬である。



八、誰が袖



筆者 堤等栄

奉納 天保二(一八三二)年八月

奉納者 阿部山城守領分八給内惣代名主 平兵衛

河野権右衛門知行所 同 名主 卯兵衛

阿部山城守とは、上総佐貫藩主阿部正高まさたかのこと。河野権右衛門とは幕府歩兵奉行河野通仰か、詳細は不明。いずれにしても八幡以外の住人である平兵衛・卯兵衛によって奉納されている。

誰が袖とは、衣桁に女性の着物を掛けた画題の事。筆者堤等栄については、二代目堤等淋の弟子にあたる。

九、瀬田の唐橋図



筆者 堤栄川

製作期 天保二(一八三二)年八月

奉納者 濱本町

国太郎 丑太郎 勘六 吉太郎 俣太郎 源

次郎 吉太郎 文吉

瀬田の唐橋とは滋賀県大津市の瀬田川に架かる東海道の橋。「瀬田の夕照」は近江八景の一。瀬田の橋・瀬田の長橋とも呼ばれる。

琵琶湖南西部の八つの景勝を「近江八景」と呼ぶ。石山の秋月、比良の暮雪、瀬田の夕照、矢橋の帰帆、三井の晚鐘、唐崎の夜雨、堅田の落雁、栗津の晴嵐。明応九(一五〇〇)年に近江国に滞在した近衛政家が、当地にちなんでの和歌八首を詠んだのに由来するとされるが、近衛政家はその日洛中の自宅にいたことが判明。

また、近衛信尹自筆の近江八景和歌巻子の奥書に、現行の近江八景と同様の名所と情景の取り合わせに至る八景成立の経緯が紹介されている。よって現在ではこの記事に基づき、現行の近江八景の成立は近衛信尹によるものとする見方が有力となっている。



十、弓矢八幡神の降臨図



筆者 堤等国

奉納 安政二（一八五五）年

奉納者 廣瀬姓

大願成就の奉賽に奉納されたと伝わる。画題の弓矢八幡とは、弓矢の神である八幡大菩薩の事。

十一、雪中の都落ち



筆者 探秀藤原守雄

奉納 安政四（一八五七）年

奉納者 南町 市川太助

常盤御前（ときわごぜん、保延4年（1138年）、没年不詳）は平安時代末期の女性で、源義朝の側室。

常盤は近衛天皇の中宮・九条院（藤原皇子）の雑仕女で、雑仕女の採用にあたり都の美女千人を集め、その百名の中から十名を選んだ。その十名の中で一番の美女であったという。後に源義朝の側室になり、今若・乙若・牛若を産む。平治の乱で義朝が謀反人となって逃亡中に殺害され、子供たちを連れて雪中を逃亡し大和国にたどり着く。その後、都に残った母が捕らえられたことを知り、主であった九条院の御前に赴いてから、清盛の元に出頭する。出頭した常盤は母の助命を乞い、子供たちが殺されるのは仕方がないことけれども子供達が殺されるのを見るのは忍びないから先に自分を殺して欲しいを懇願する。その様子で常盤の美しさに心を動かされた清盛は今若、乙若、牛若を助命した。





筆者 堤等国

奉納 明治十五（一八八二）年七月

瀬田の唐橋に大蛇が横たわり、人々は怖れて橋を渡れなくなったが、そこを通りかかった秀郷は臆することなく大蛇を踏みつけて渡ってしまった。その夜、美しい娘が訪ねてきた。娘は琵琶湖に住む龍神一族の者で、昼間秀郷が踏みつけた大蛇はこの娘が姿を変えたものであった。娘は龍神一族が三上山の百足に苦しめられていると訴え、秀郷を見込んで百足退治を懇願した。

秀郷は快諾し、剣と弓矢を携えて三上山に臨むと、山を七巻き半する大百足が現れた。藤太は矢を射たが大百足には通じない。最後の一本の矢に唾をつけ、八幡神に祈念して射るとようやく大百足を退治することができた。秀郷は龍神の娘からお礼として、米の尽きることはない俵などの宝物を贈られた。また、龍神の助けで平将門の弱点を見破り、討ち取ることができたという。



筆者 二代目昇亭北寿

奉納者 仲町鞍屋忠五郎

雪のまだ残る吉野山で、佐藤忠信は覚範こと平教経と決着をつけることになった。鎌倉勢も攻め寄せるが忠信一人でそれらを退ける。教経が現われ忠信と激しい勝負となるが、忠信は教経に組み敷かれてしまう。ところがそこへもうひとり忠信が駆けつけ、教経に取り付いた。さしもの教経も仰天し振り払おうとすると、その忠信は義経の鎧に変じ、その隙を狙って組敷かれた忠信が教経に手を負わせる。源九郎狐が幻術を以って忠信を助けたのである。そこへ義経が現われ、安徳帝は母である健礼門院のもとで出家を遂げたと告げると、川越太郎もやってきて藤原朝方を縛って引き出し、頼朝を討てという院宣はこの朝方の謀略であると顕れたので、その処分を義経に任せるとの後白河院の言葉を伝えた。平家追討の院宣もこの朝方のしわざと聞く、こいつを殺すのが一門への言い訳と、教経は朝方の首を打ち落とす。その教経は兄継信のかたきと佐藤忠信に討たれ、平家はここにまさしく滅びたのであった。



十四、八岐大蛇



筆者 不詳  
奉納 不詳  
奉納者 不詳

須佐之男命が出雲国に降り立つと、川上から箸が流れ  
てきた。川を上ると、美しい娘を間に老夫婦が泣いてい  
た。その夫婦は足名椎命と手名椎命であり、娘は櫛名田  
比売と叫んだ。

夫婦の娘は八人いたが、年に一度、八岐大蛇という八  
つの頭と八本の尾を持った巨大な怪物がやって来て娘を  
食べてしまう。今年も最後に残った末娘の櫛名田比売が  
食べられてしまうと泣いていた。

須佐之男命は、櫛名田比売との結婚を条件に、八岐大  
蛇退治を請け負った。まず、須佐之男命は櫛名田比売を  
櫛に変えてしまい、自分の髪に挿した。そして、足名椎  
命と手名椎命に、強い酒を醸し八つの酒を満たした酒桶  
を置くようにいった。準備をして待っていると八岐大蛇  
がやって来て八つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒  
を飲み出した。八岐大蛇が酔って寝てしまうと、須佐之  
男命は十拳剣で切り刻んだ。

十五、江の島詣図 一



筆者 不詳  
奉納 不詳  
奉納者 山中兼吉

古来から「弁天様の島」として親しまれ、江の島詣で  
の客でにぎわった江の島。江戸時代に伊勢神宮を目指し  
た「伊勢参り」は有名だが、実は丹沢の大山を詣でる「大  
山詣で」や江の島の江島神社を参拝する「江の島詣で」、  
さらには箱根権現を目指す「箱根詣で」などが人気を集  
めた。



十六、伊勢・金刀比羅参宮



筆者 不詳  
奉納 不詳

「一生に一度はこんびら参り」と江戸時代中期には、讃岐金刀比羅宮への参宮が爆発的に増え、伊勢参宮に次ぐほどの人気となっていた。金刀比羅宮への道中は遙か長く、途中に伊勢参宮や熊野詣で、京都の名利詣で、西国四十八カ所廻りなどを兼ねて行われることが多かった。金刀比羅宮は海上交通の守り神として信仰されており、漁師、船員など海事関係者の崇敬を集める。かつて、漁業を生業とする者が多かった八幡においても、金刀比羅宮への信仰は極めて篤く、漁船に船霊様として祀られたり、家庭内の神棚を、金刀比羅宮用に別に用意して祀られたりするほどであった。

十七、神功皇后と武内宿禰



筆者 不詳  
奉納 明治十六（一八八三）年八月  
奉納者 出羽神社参詣同行

鈴木与助 堀口源治郎 市川重五郎 寺島久  
次郎 小川亀吉 板倉久八 佐久清治郎 松  
田卯之吉 山中巳之藏 永野豊太郎 中嶋長  
吉 岩田長吉 伊藤吉太郎 関七三郎

仲哀天皇の後をうけ、皇后（神功皇后）は武内宿禰の助けを得て、新羅国を攻めこれを従わせた。その後、皇后は大和の国へ凱旋しようとしたが、仲哀天皇の親王、香坂王・忍熊王が反乱を起こしたため、回り道である紀伊水門を経て帰京した。皇后は群臣と協議し忍熊王を討つことを決め、小竹宮に入ったところ、突如として日が陰、昼間でも夜のような暗さになってしまった。二つの神社の神職を合葬したために陰ったとわかり、小竹神社の神職と天野神社の神職を合葬していたことがわかり、改めて別々に葬ったところ、再び日が照り輝くようになった。



十八、衣川の戦い 源義家と安倍貞任



筆者 不詳

奉納 明治十七（一八八四）年三月

奉納者 当宿 今井惣平

平安時代後期陸奥国の安倍氏は、陸奥国の奥六郡に柵を築き、半独立的な勢力を形成していた。そこで朝廷は源頼義に頼時を滅ぼすよう命じ、頼時を滅ぼすが、頼時の長男貞任を中心とする残党が抵抗した為に、前九年の役が勃発する。

前九年の役を終盤、安倍貞任は義家の攻撃に堪え切れず、立て籠もった衣川の館から逃れようとした。義家は後ろを見せるとは卑怯ぞと追いかけて「衣のたてはほころびにけり」（衣の経は綻びる様に、衣川の館も崩れたぞ）と一句を詠みかけたら、貞任は馬を止め振り向き「年を経し絲の乱れの苦しさに」と上の句を付けた。

義家は貞任の歌心に感心し、つがえていた矢を外して逃がしてやった。

十九、上総名所八幡神社



筆者 不明

奉納 明治十九（一八八六）年旧二月十八日

奉納者 上総国市原郡五所金杉邸願主 関本作次郎





筆者 不詳

奉納 明治十九（一八八六）年六月十九日

奉納者 土屋勘三郎

古来から「弁天様の島」として親しまれ、江の島詣での客でにぎわった江の島。江戸時代に伊勢神宮を目指した「伊勢参り」は有名だが、実は丹沢の大山を詣でる「大山詣で」や江の島の江島神社を参拝する「江の島詣で」、さらには箱根権現を目指す「箱根詣で」などが人気を集めた。



筆者 不詳

奉納 明治十七（一八八四）年八月十五日

奉納者 当宿 清水仁太郎





筆者 不詳

奉納 明治二十二(一八八九)年十月二十二日



筆者 不詳

奉納 明治二十四(一八九一)年四月二十三日

奉納者 浅野正蔵

『日本書紀』などによれば、夫の仲哀天皇の急死後、住吉大神の神託により、お腹に子供(のちの応神天皇)を妊娠したまま筑紫から玄界灘を渡り朝鮮半島に出兵して新羅の国を攻めた。新羅は戦わずして降服して朝貢を誓い、高句麗・百済も朝貢を約したという(三韓征伐)。

渡海の際は、お腹に月延石や鎮懐石と呼ばれる石を当ててさらしを巻き、冷やすことよって出産を遅らせたとされる。その帰路、筑紫の宇美で応神天皇を出産し、志免でお紙目を代えたと伝えられている。他にも壱岐市の湯ノ本温泉で産湯をつかわせたなど、九州北部に数々の伝承が残っている。

神功皇后が三韓征伐の後に畿内に帰るとき、自分の皇子(応神天皇)には異母兄にあたる香坂皇子、忍熊皇子が畿内にて反乱を起こして戦いを挑んだが、神功皇后軍は武内宿禰や武振熊命の働きによりこれを平定したという。





筆者 不詳  
奉納 不詳  
奉納者 片町 船越泰□

張良が始皇帝を暗殺しようとして失敗し下邳に身を隠していたある時、一人の老人と出会う。老人は沓を橋の下に落として、袂を歩いてきた張良に「拾え」と命じ、張良はそれに従った。老人は一度は笑って去ったが、後に戻ってきて五日後の朝に再会を約束した。五日後、先に来て待っていた老人は、日が昇ってから現れた張良に「目上の者との約束をしておきながら遅れてくるとは何事か」と、また五日後に会う約束をする。張良は次の五日後、日の昇ると同時に約束の場所へ行くが、老人は既に来ていて以前と同じことを言う。三度目には日の昇る前に行くと言われ、老人は後から来て、「その謙虚さこそが宝である」と言い、張良に「太公望兵書六韜」を与え、「この書を読み十年後には王者の軍師となるだろう」と告げる。「十三年後にまた逢おう。済北の穀城の下にある黄色い石が私である」とも。黄石公の予言はすべての中し、張良は、穀城の黄石を得て、これを祀ったという。



筆者 不詳  
奉納 明治二十四（一八九一）年九月  
奉納者 五井平田村三枝藤次

熊野三山への参拝者は日本各地で先達によって組織され、檀那あるいは道者として熊野三山に導かれ、三山各地で契約を結んだ御師に宿舎を提供され、祈祷を受けると共に山内を案内された。熊野と浄土信仰の繋がりが強くなると、念仏聖や比丘尼のように民衆に熊野信仰を広める者もあらわれた。また観音の化身とされた牟須美神を祀る那智大社の那智浜からは観音が住むという補陀落を目指して、大勢の僧侶が小船で太平洋に旅立った。次第に民衆も熊野に頻繁に参詣するようになり、俗に「蟻の熊野詣で」と呼ばれるほどに盛んになった。また、各社で発行される熊野牛王符（または牛王宝印（こおうほういん）とも）は護符としてのほかに、起請文（誓約書）の料紙として使われ、この牛王符に書いた誓約を破ると神罰を受けると信じられた。





筆者 不詳

奉納 明治二十四（一八九一）年九月  
奉納者 北島豊吉

元来は一のみであったが、修復中に裏面より二図が発見された。

八幡の湊では、内陸部から川舟や馬背で運送されてきた年貢米をはじめ薪炭・材木などがここで五大力船に積み替えられて江戸へ送られた。江戸からの戻り船には衣糧・雑貨・肥料・砂糖・醤油・酒などが積まれました。船は、長さ三二尺（9.4m）から六五尺（19.8m）、巾八尺（2.4m）から一七尺（5.1m）、五十石から五百石積みの帆船があった。海上からそのまま河川に入れるよう一般の廻船より細長く、喫水（きつすい）船底から水面までの長さ）が浅い船型であった。江戸時代には、こうした海川両用のため、川舟と同様に年貢賦課対象とされていた。『五大力』の名は、重い荷物を運ぶので『五大力菩薩』からとったとされている。

二十八、難破船図



筆者 不詳

奉納 明治三十六（一九〇三）年五月二十九日  
奉納者 当所 濱本町 船主 根本吉太郎 同伴磯次郎  
齋藤安太郎

この絵馬は海難に遭い、運良く助かった船の船主がお礼に奉納したと考えられている。



二十九、富士図



筆者 不詳

奉納 大正四(一九一五)年九月

奉納者 八幡町きよ